

「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第 116 回

『「小さな源流から広がる」～『純度の高い専門性と社会的包容力』～』
2022年7月2日 第46回日本小児皮膚科学会学術大会（会頭：池田志孝 順天堂大学医学部皮膚科 教授、副会頭：清水俊明 順天堂大学医学部小児科 教授；会場 グランドニッコー東京ベイ舞浜）でのシンポジウム1【結節性硬化症】の座長の機会が与えられた。前日7月1日は、会頭招宴に出席した(18:30～)。順天堂大学医学部皮膚科 教授時代の1994年会頭され、現在は、理事長の小川秀興先生、また、順天堂大学浦安病院皮膚科 教授時代の2003年会頭された高森健二先生にお逢いした。同じテーブルでは、初対面の佐伯秀久先生、小澤哲先生、森田英明先生とも有意義な会話の時間が与えられた。学術大会運営事務局の真摯なおもてなしには、大いに感激した。

【『シンポジウム1』結節性硬化症】の座長を、久保亮治先生（神戸大学大学院医学研究科内科系講座皮膚科学分野）と行った。シンポジストの『結節性硬化症の遺伝カウンセリングと遺伝子検査』【新井田要先生（金沢医科大学病院ゲノム医療センター）】、『結節性硬化症ならではのてんかん診療』【佐藤敦志先生（東京大学医学部附属病院小児科）】、『結節性硬化症の皮膚病変に対するシロリムスゲルの効果、副作用および今後の問題点』【金田眞理先生（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻、神経皮膚症候群の治療法の開発と病態解析学寄附講座）】、『小児の結節性硬化症患者へのラパマイシン塗布薬の治療：早期治療開始の意義』【（岡西徹先生（鳥取大学医学部脳神経小児科学分野））の『純度の高い専門性と社会的包容力』には、大いに勉強になった。また、久保亮治先生の的確な質問には、感動した。

筆者が、初代の日本結節性硬化症学会 理事長時代、編集した「結節性硬化症の診断と治療最前線」（2016年；「診断と治療社」）が鮮明に思い出された（画像）。筆者は、序文に『——本書が、「病気・遺伝病は単なる個性である」という社会の構築と「医療の共同体」を目指し、日常診療の質の向上と患者さんQOLの改善の一助となれば望外の喜びであります。』と記述した。アメリカ・癌研時代の研究テーマ「遺伝性がんモデル疾患」から、単離・同定した遺伝子（1994年）が、ヒト結節性硬化症の原因遺伝子（*TSC 2*）のホモログであった。中皮腫のマーカー（*ERC*）も、このモデルの多段階発がんの解析中に単離・同定し

たものである（1995年）。まさに「小さな源流から広がる川の流れ」の如くである。

